

特集
京都
古都の美とまちづくり

Special Features
Kyoto
Beauty and Renovation of the Traditional City

古都のまちづくり史
History of the Traditional City Renovation

山並み景観の歴史

もうひとつの京都

中嶋節子

NAKAJIMA Setsuko

大阪市立大学生活科学研究科/専任講師



JR 京都駅の展望フロアから北を望むと、山が市街地を包み込むように横たわっているのが見える。京都は南をのぞく三方向を山に囲まれ、しかも、それらが市街地のすぐ近くまで迫るといった独特の地理的条件にあることを、ここに立つたびに改めて確認する。京都と同規模の都市で、これほど市街地と山とが接近したところはほかにはないだろう。京都では山は市街地の背景として、常に視界に存在する(写真1)。

こうした山々は、平安京遷都の詔勅に「山河襟帯自然に城を作す」と記されたように、都市を守る城壁とみなされ、遷都にあたって理想的な地形と考えられた。そして、山々に囲まれた地形がもたらす閉鎖的で守られた空間の居心地のよさと、人工的な都市空間にいながらにして自然を身近に感じることのできる環境は、長い歴史を通して京都独自の都市文化を育てる土壌となった(写真2)。京都らしさは山の存在によって理解される部分が少なくない。

現在、京都をとりまく山の多くは、シイを中心とする鬱蒼とした林に覆われている。市街地に特に近い東山で

は、季節になるとシイの花が黄色くかすんで見える。しかし、かつての京都の山はこのような姿ではなかった。都市と近接する山々は、古代から都市の営みと無関係ではいられず、その関係においてさまざまに姿を変えてきたのである。

ここでは、京都をとりまく山々が都市空間の一部としていかに存在したか、そしてそれらはどのような姿であったのか、山をめぐるもうひとつの京都の歴史を辿ってみたい。

1—生活の場としての山—近代以前の都市生活と山

●1 生産地・行楽地としての山

京都をとりまく山々は、平安京建設以前から用材や薪、柴などの林産物の供給地として利用されてきた。遷都以降、こうした林産物が大消費地である市中へ移出する商品となったことから、周辺の間々では早い時期から高密度な森林利用が行われるようになる。市街地に近い場所では主に薪や柴などの燃料を中心に採取された(図1)。洛西や洛北では、燃料以外に松茸の生産が盛んで、

経済的価値の高い商品として取り引きされた。京都市街地近郊の山は、山裾に居住する人々による里山的な利用のみならず、市街地へ移出する商品の生産地として機能していたことが大きな特徴であった。こうした山の利用は近代にいたるまで続く。

林産物の生産地としての役割のほかに、市街地周辺の山々は、また、花見や松茸狩り、紅葉刈りなど都市生活者が休日を通り、季節を楽しむリクリエーションの場としても重要であった(図2)。山の麓に点在する名所や旧跡は、祭礼などの年中行事と結びつくことで、都市生活のサイクルのなかに組み込まれていた。そういった状況は、中世、近世に描かれた多くの絵画史料や文献資料にたびたび登場する。

●2 アカマツの景観

これまでの研究によると、市街地近郊の山々は江戸時代末期まで、社寺周辺にスギやヒノキ、嵐山などの名所にサクラなどが混じる他は、大部分が樹高の低いアカマツであったことがわかっている。なかには、柴草のような低い植生で覆われた部分もあり、場所によっては禿地も少なくなかったとされる(図3)。アカマツは、山林利用が進んだ、やせた土地に育つ樹種である。こうしたアカマツの林は、山々が林産物の産地として高密度に利用された結果あらわれた植生であった。アカマツが主体の山の景観は、現在われわれが目にするの緑濃い鬱蒼とした姿とは対照的に、赤い樹皮と薄い緑の葉によってつくられる明るく軽快なものだったと考えられる。

●3 山の景観保護

こうした山の景観は、単に利用することで維持されていたわけではなく、さまざまな規制によって保護されていた。保護の目的は、林産物生産、国土保全、そして景観維持の大きく3つに分けることができるが、そのうち景観維持のための森林保護は都市ならではの注目される。

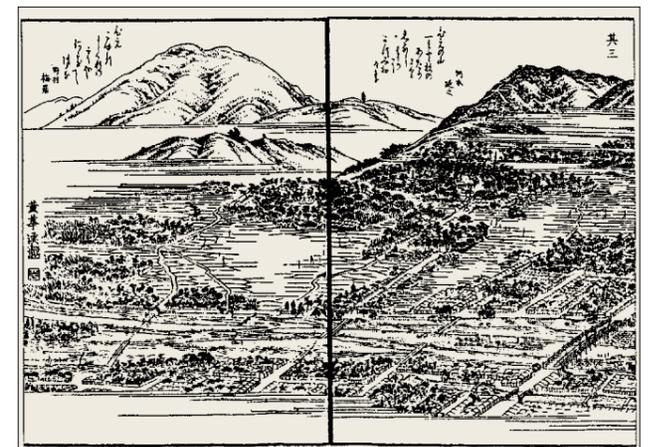
景観維持のための保護策としては、古くは798(延暦



■図1—薪や柴を市中に運ぶ八瀬の人々『都名所図会』巻之三1780より



■図2—西山で松茸狩りに興じる人々『都名所図会』巻之四1780より



■図3—東山の北部を描いた図 左が比叡山で禿山に近い状態が描かれている 右の大文字山はまばらな林が見て取れる 『再撰花洛名勝図会』1864より

17)年の太政官符に、「其京城側近高頭山野常令衛府守及行幸經過頭望山岡依旧改莫令斫損」(『類聚三代格』)とあり、行幸の際して眺望の対象となる山の景観が損なわれることのないよう留意していたことが伺える。近世にも1764(明和元)年に、京都の周辺10里四方の御林を用材以外の目的で伐採することを禁じた記録が残されている。同様の記録は、歴史を通して散見される。これらは、周辺の山々を都市景観の一部として捉えていたことを示すものであり、利用と保護のバランスの上にアカマツの景観が維持されていたことが理解される。

2—都市景観としての山並み—近代都市計画と山

●1 都市と山との新たな関係の模索

古代、中世、近世を通して続いた都市生活と山との関係は、近代以降、その性格を大きく変えていった。近代には、市街地周辺の山々は、林産物の供給地としての役割を次第に失い、もっぱら都市環境、都市景観の構成要素として捉えられるようになる。そこでは、もは



■写真1—賀茂川から見た東山の山並み



■写真2—毎年8月16日に行われる大文字送り火

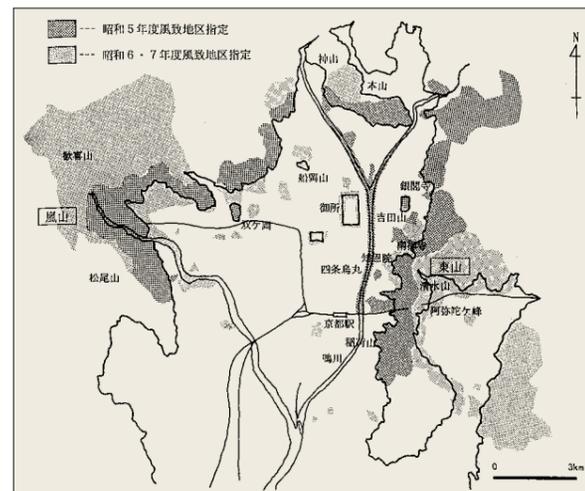
や生産地としての利用を前提とした保護は必要とはされず、環境や景観に重点をおいた都市と山との新しい関係が模索された。

山の景観保護の動きは、明治期には近世以来の名勝地などを中心に行われたが、やがて都市規模で展開されるようになる。京都ではすでに、1900(明治33)年に、市の政策として市街地を取り巻く山々を公園として整備する構想が提示されていた。これは1920(大正9)年の都市計画法の施行を受けて、「計画」というかたちとなって具体化されていく。

1921年の「京都市計画」では、市の周囲に「遊覧道路」をめぐらし、山と山に続く平野は「自然美工芸美ヲ基調トスル遊覧都市」として経営する方針が打ち出される。そしてさらに「遊覧都市」として充実させるため、都市公園とともに「天然ノ風光ヲ遺憾ナク観賞セシメ得ベキ」施設を設置した「公園系統」を造る必要があるとされる。この方針は、翌年に設定された都市計画区域に明確に示されていった。このとき都市計画区域に設定されたのは、四条烏丸を中心とする半径約23kmの地域で、周囲の山地を広く取り込む内容であった。山地を大きく取り込んだことについて、「京都市計画区域設定理由書」では、

京都ノ特色タル風光ハ主トシテ、是等山地ニ依リ發揮セラレ、名勝旧蹟亦此ノ裡ニ存在スルモノ多キヲ以テ、(中略)公園都市タルノ特徴ヲ益々發揮セシムルノ施設ヲ為スノ緊要ナルモノアルヲ認め、(中略)山地ヲモ計画区域ニ編入シタリ

と、説明する。ここに至って市街地を取り囲む山々は、都市計画の中に明確に位置付けられ、計画の対象として捉えられたのである。さらに、1930年の第1回目の風



■図4—京都市の風致地区指定図(1930・31・32年)

致地区指定では、市街地周辺の山地が約3500haにわたって風致地区に編入され、都市計画における山の存在がますます強調された(図4)。これは都市計画区域の15%にもあたり、これほど広い範囲が風致地区に指定されたのは京都が全国ではじめてであった。京都では、市街地だけでなく自然環境をも「計画」の対象とすることで、近代の市街地と山との新しい関係が構築されようとしたのである。市の土木局長であった高田景は、

市中に山野あり。むしろ「田舎に京あり」の形態こそ本市現在の姿であり、同時に又本市将来の環境でなければならぬと思ふ

と、当時の都市計画方針を的確に語っている。

●2 創造される山並み景観

都市計画の中で山が都市環境として重視されたことで、昭和初期には山の景観に対する考え方も大きく変化していった。この時代には、都市における自然は、望ましい姿に積極的に造り変えていく必要があると考えられるようになる。そこでは、近代以前に見られた生産地としての存続ではなく、京都の都市景観としてふさわしい山並みを造ることが目論まれたのである。自然を人工的に操作しようとする考え方は、当時の都市や建築、造園関係の雑誌にたびたび登場し、昭和初期の自然環境の捉え方として広く支持されていたことがわかる。こうした意見のなかには、京都を名指しで取り上げたものも少なくなかった。

そうした都市景観に対する考えを具体化していったのは、明治以降、京都周辺の山々を管理していた大阪営林局であった。当時、森林の伐採や植林などは、営林局が作成する森林施業計画に従って行われていた。施業計画を追っていくと、1929(昭和4)年以降、景観保護に重点をおいた施業に本格的に取り組みはじめたことが注目される。

計画に大きな変化が見られた昭和初期は、市街地を取り巻く山の景観が大きく変化しはじめていた時期でもあった。永い年月にわたって京都市街地近郊の山々を覆っていたアカマツの林は、近代になって生産地としての利用が制限され、かなりの部分で放置されたままにおかれたことによって、次第に姿を消していた。そして、アカマツに代わって徐々に京都周辺山林の原生の姿とされるヒノキやシイの林へと遷移しはじめていたのである(写真3)。視覚的には、明るい色調の軽やかな景観から、濃い緑の鬱蒼として景観に移っていったことになる。それは、京都の都市景観そのものが変化することを意味していた。

こうした変化を目の当たりにして、営林局の技師らは



■写真3—1935年頃の嵐山の景観 ヤマザクラやアカマツが減少し、アラカシやヒノキが目立つ



■写真4—1935年1月の「東山復旧計画座談会」の様子

京都の山林景観のアイデンティティであるアカマツ林が失われることに危機感を抱くようになる。そして、施業計画のなかでアカマツ林が京都の山の景観としていかに好ましいものであるかを強調し、アカマツ林の景観を維持するための積極的な施業の必要を訴えていったのである。施業計画には、アカマツ林の景観について、

社寺仏閣ノ屋根尖ツタ塔等ガアカマツノ緑乃至ハ赤イ幹ナドト映り合フ処ニ京都ノ美ガアルモノト思慮セラル

と、アカマツの葉の緑と幹の赤がつくる明るく軟らかな景観が、神社仏閣の建物と調和している姿が京都の美であるとし、アカマツの消滅した林は「風致上何等ノ価値ナキ林分」とする。

●3 嵐山と東山の風致施業計画

景観変化に対する危機感はやがて、嵐山や東山の景観を操作することを意図した『嵐山風致林施業計画書』(1933)『東山国有林風致計画』(1936)へと発展していった。これらの風致施業計画は、森林の施業によって理想的な景観を作り上げることを目的としたもので、全国的にも先駆的な試みとして注目された。これらの計画では、嵐山は名勝地にふさわしく「アカマツ、ヤマザクラを主体とする」、「何処の地点を切り離しても、一幅の絵画となし得る」景観が、東山ではアカマツを主体とする森林のなかに、濃い緑の色調をもった林が景観を引き締め、落葉樹が四季の変化をもたらすような森林が「ふさわしい林」として目指された。ただ、東山については、計画作成中に室戸台風の大きな被害を受け、計画の内容は災害復旧を中心とするものに改められた。その東山の復旧事業なかでとりわけユニークなのは、京都駅や鴨川の橋の上など、市内の眺望点と考えられる場所に人を配し、山上と手旗で合図を送りながら、植林を行う「手旗植林」が行われたことである。いかに市街地から望む山の景観が意識されていたかが伺える。

●4 求められた山の景観

では、市民は当時どのような山が京都の背景としてふさわしいと考えていたのか。東山の施業計画を作成するにあたって、大阪営林局は「東山風致復旧計画座談会」を開催している(写真4)。出席者は、営林局関係者のほか、府知事、農学者、社寺関係者、保勝会関係者などであった。そこでは、大きな樹木を植林して早く景観を復旧してほしいとする意見と、小さな樹木をゆっくり育てて丈夫な林につくり上げたいとする意見が対立する。

保勝会関係者は、「東山は市街から眺めて観賞することが多いから、二間から二間半の樹を植えて貰えば結構」とするのに対し、営林局側では大きな樹を植えることに難色を示す。それでも保勝会関係者は、「田舎の山の植林はそれで宜しいでしょうが、京都の東山は(中略)大きなもので早く山にして頂きたい」と要求を曲げない。他の出席者からも、「芸術的にやらねばならぬ」といった発言がみられた。こうした京都の山はまず美しくなければならぬとする考えは、行政や一般市民にも少なからず共有されるものであった。

自然と都市との関係が時代とともにドラスティックに変化することは、現代においてもまた同様である。そしてその変化は、自然そのものの変化を伴う。自然をあまりにも軽視した戦後、高度成長期、バブル経済期を経て現在、都市林の再生や環境共生など自然環境を取り込んだ都市空間の創造が日本各地で試みられている。京都でもそうした活動が各所で進められている。今後、京都の山並みはどのように変わっていくのだろうか。

京都を訪れるとき、市街地や観光地とともに周囲を取り巻く山々にも目を向けていただきたい。そこには、もうひとつの京都の歴史と現在がある。